

音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点市民共創検討事業
ラーニングプログラム「はなす、あるく、きいてみる」Vol.1「まちをつなぐアートの“はたらき”」
開催報告

1 開催概要

仙台市では、「文化芸術の総合拠点」と「災害文化の創造拠点」となる音楽ホール・中心部震災メモリアル拠点の複合整備を進めています。本施設の事業や管理運営を、市民とともに考えていくため、このプログラムでは、多様な活動を担う人やそれらが生まれる場を訪ね、ともに学び、意見を交わすことで、わたしたちが暮らすまちの文化活動や文化施設の土台となる視点を育み、これからの世代とともに本施設事業の「ありよう」を考えていく試みとして実施しています。

第1回は、「まちをつなぐアートの“はたらき”」をテーマに、2日間のプログラムで実施しました。



写真＝小岩 勉

- ・1日目:令和8年8月8日(土) 会場:せんだい演劇工房 10-BOX
- ・2日目:令和8年8月9日(日) 会場:仙台市市民活動サポートセンター
- ・参加者:2日間のべ38名
- ・ナビゲーター:及川多香子さん(一般社団法人 PLAYART せんだい 代表)
- ・モデレーター:佐藤李青さん(複合施設管理運営アドバイザー)
- ・話し手:八巻寿文さん(国境なき劇団 代表、舞台照明家、美術家、防災士)
大橋端月さん(音楽のおもちゃ箱 代表)
梶原千恵さん(宮城教育大学 准教授)
及川多香子さん(アーツプロデューサー)
松浦正和さん(可児市文化創造センターala 創造事業課)

2 プログラム概要

1 日目「アート」のはたらきを考え、現場をあるく



1日目の会場は、2002年にオープンした舞台芸術の発信と交流の拠点、せんだい演劇工房 10-BOX

はじめに



2日間のモデレーターを務める佐藤李青さんは、東京都による被災地支援事業「Art Support Tohoku-Tokyo」を立ち上げから事業終了まで担当してきた方です。冒頭では、この2日間通して、これからの文化施設を考える土台となる仙台のとりくみや視点を持ち寄り、ともに学ぶ(ラーニング)の時間であることが確認されました。

続いて仙台市青葉山エリア複合施設整備室 佐藤陽子課長から、仙台市の複合施設の計画のこれまでの経過や複合施設のコンセプトを紹介しました。

セッション 1「アートがあるとまちはどうかわる？」(及川多香子さん)

2 日間のナビゲーターは及川多香子さん。及川さんは仙台市出身のアーツプロデューサーとして、「すべての人にアートを」を理念に、主に舞台芸術や文化政策の分野で活動しています。



プレゼンテーションする及川多香子さん

及川さんはまず、一見敷居の高い「アート」「文化」という言葉を捉えなおすことから始めました。

例えば、「アート」と聞くと美術館の絵や芸術家がつくるものを思い浮かべる人が多いが、それだけではない捉え方があるのではないかと。何に心を動かされるかは人それぞれであり、「アート」という言葉そのものを問い直す必要があると語ります。「文化」という言葉についても、最初から文化として生まれるのではなく、誰かの表現や気づきをきっかけに、対話を通じて、あとから文化になっていくもの、という見方が示されました。

例に挙げられたのは、2011 年 4 月、避難所となった石巻市の小学校の体育館で行われた仙台フィルの演奏でした。その日に奏でられた曲は、傷ついた人を癒すために作曲されたものではありません。それでも、聴いた人に涙が流れ、人と人がつながっていく。つくり手が意図したものとは別のものが受け取られる——この「変換」する力を、及川さんは「はたらき」と呼びました。これらの視点から、2日間のさまざまな事例を見聞きし、考えてほしいと語りました。

セッション 2「人が集まる“つなぎ目”になる」(八巻寿文さん)

八巻寿文さんは舞台照明家・美術家で、10-BOX の工房長と、せんだい 3.11 メモリアル交流館の館長を務めてきました。このセッションは、施設の中を歩きながら話を聞く形で進みました。



震災後の仮設住宅との交流について話す八巻寿文さん

施設近隣の卸町公園には震災後に仮設住宅が設置され、10-BOX は夏祭りや機材提供などを通じて、約 5 年間交流を続けました。八巻さんは、住民の退去が進む最後の 2 年間の難しい状況にも触れ、この経験が後に立ち上げに関わった仙台 3.11 メモリアル交流館の運営にも生かされたと語ります。

震災直後に、生活介護事業所のぞみ苑の利用者と避難生活をともにした稽古場や、災害支援拠点となった部屋、地域に開かれた作業場なども見学しました。のぞみ苑の利用者とは、震災前から清掃委託やワークショップ、合同避難訓練を重ねていたため、震災時も混乱なく共同生活ができたことから、文化施設の災害時の機能は、日頃の近隣との関係性に支えられていることが紹介されました。

10-BOX 内に戻り、1980 年代から仙台市・東北の演劇シーンを支えてきた取り組みを年表や写真で振り返りました。演劇工房の必要性を「劇場が応接間なら、もてなすための台所としての工房が必要」と伝えてきたことや、郷土芸能の上演支援、震災後にヤギを連れて仮設住宅や市民センターを巡回した交流活動などが紹介されました。その背景には、「演劇が社会に役立つと示さなければ 10-BOX の存続に関わる」という強い思いがあったといいます。

一方で、八巻さんは地域に根づく表現を「野生の領域」といい、「文化に上意下達はありえない」と強調しました。文化行政の立場から、地域文化やアーティストの表現の自立性とその創作環境を守る支え手として長年尽力してきたことが語られました。

セッション 3「日常のなかでアートに触れる場をつくる」(大橋端月さん、梶原千恵さん)



大橋端月さんは、生涯学習の仕事に携わったのち「音楽のおもちゃ箱」を立ち上げ、2025年に法人化して代表を務めています。

0歳から参加でき、泣いても動いてもかまわない音楽会。保育所や学校への訪問演奏。日常のなかに音楽の入口をつくる取り組みが紹介されました。音や光の刺激をやわらげた休憩室や二か国語の字幕を備えた「どなたでもコンサート」は、「誰でもどうぞ」と伝えるだけでは届かない人がいる、という気づきから始まっています。参加のしやすさは、進行や動線、当日の声かけ、事前の案内といった一つひとつの手順が積み重なって成り立つものだ、という話でした。

「どなたでも」を支える場の設計

「誰でもどうぞ」だけでは、届かない

参加しやすさは、設計するもの

事前案内	会場導線
客席配置	途中入退室
音量や照明	休憩スペース
スタッフ共有	声かけ
プログラムの長さ	対象に合わせた進行

場の思想は、

- ・空間設計
- ・運営設計
- ・人の関わり方

に、表れる



大橋さんのプレゼンテーションより(「どなたでも」を支える場の設計)

「文化施設は、誰に、どんな入口をひらけるのか。その入口を、誰が育てていくのか」。そんな問いかけでセッションを終えました。



梶原千恵さんは災害伝承とアートに関係の研究者で、2024 年から宮城教育大学准教授。著書に『災害伝承とアートプロジェクト』(2026 年)があります。

人は、自分の経験を選び、意味づけ、つなぎ合わせた「物語」によって自分を理解している。ところが災害や身近な人の死去などの予期せぬ出来事は、その「物語」の紡ぎを中断してしまう。しかし、再び自分の「物語」を「語り直し」するためにアートが大きな力を発揮すると説明します。

仙台フィルの避難所コンサートや、震災を知らない世代が被災地で聞き取った体験を語り直す映像作品を例に挙げながら、「言葉にならない経験に形を与える」「経験との間に距離をつくる」「立場の異なる人をつなぐ」というアートの 3 つのはたらきを示しました。



梶原さんのプレゼンテーションより(「芸術×メモリアルの循環」)

そのうえで、芸術とメモリアルは「記録を受け取る」「表現に変換する」「共有・対話する」「新しい記録になる」という順に循環しているのだ、という見取り図が示されました。



1日を振り返りながら話し合う

クロストーク

1 日目を振り返る全体でのクロストークでは、次のような論点が出ました。

●地域へ開く文化施設と「アウトリーチ」について

- ・施設から出向くだけでなく、拠点を持たない団体がまちの中で地域の人と一緒に活動をつくる形が増えている。
- ・アウトリーチ先の場にいた人にしか伝わりにくく、価値を外へ伝える手立てが弱かった。それを言葉にする仕事が必要である。

●参加のハードルを下げつつ、余白をつくることの大切さ

- ・「創造拠点」といわれると、参加のハードルが高いと感じる人もいる。創造を強制するのではなく、市民に分かりやすい言葉で表現することも大切。
- ・見るだけでなく、誰かと一緒に何かをすることも表現である。何もしなくてよい余白も必要である。

●記録を残し、異なる時代へ手渡すことの重要性

- ・経験を記録し残す場と、異なる時代や立場に伝わる形へ翻訳する人が必要である。
一般化には必ず誰かの意図が入るため、一つの意味にまとめず異なる視点を残したい。
- ・相馬野馬追や雄勝法印神楽のように、長く続けるために形を変えるという考え方がある。「形を与える」「余白をつくる」「出会わせる」という継承の仕組みは、共有できるテクニックである。
- ・学芸員が数百年先を見据えて作品を保存し手渡すように、伝統芸能を含むパフォーミングアーツにもそういった視点が必要ではないか。
- ・沿岸部のメモリアル交流館や各施設は被災地と直接向き合う場であり、そこでは描きにくいことがある。中心部の拠点にはその役割が期待されるのではないか。

2 日目:文化施設と「まちの元気」を考える

2 日目は、仙台市市民活動サポートセンター地下 1 階の市民活動シアターで開催しました。

セッション 4「文化施設が、まちを元気にする」(松浦正和さん)

松浦正和さんは仙台市の出身で、2007 年から岐阜県可児市文化創造センター ala に勤め、劇場が地域へ出ていくプログラムを担当してきました。

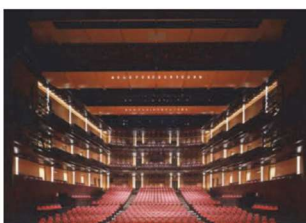


可児市は人口約 10 万人、市民の約 1 割が外国籍です。

ala の出発点にあるのは、地域が抱える課題の根にあるのは人のつながりの欠如である、という見立てでした。そこから劇場を「人間の家」と位置づけています。市民に伝わる言葉で名づけた「ala まち元気プロジェクト」は年間およそ 30 本。学校でのワークショップ、乳幼児の親子や高齢者が毎週集まる場、多文化共生や福祉と結びついた事業などを実施してきました。

背景には、薬ではなく人とのつながりで健康を支える「社会的処方」の考え方があり、福祉・教育・医療の関係機関とは定期的に情報を交換しているといいます。

可児市文化創造センター ala <https://kpac.or.jp>



松浦さんのプレゼンテーションより(可児市文化創造センター ala)



松浦さんのプレゼンテーションより(コレクティブインパクトマップ)

松浦さんは、劇場を「施設」ではなく「社会機関」と捉えていると話しました。税金で成り立つ以上、来館する人だけでなく全市民に働きかける責任がある、という考え方です。あわせて、劇場はもともと記録を残す機能を持ちにくいけれども、災害文化というテーマのある仙台では活動のアーカイブという別の形がありうる、という指摘もありました。

セッション 5「はなす」

2日間の活動を踏まえ、参加者同士で、気になったことを話し合いました。



グループでの対話の様子



対話から出たコメントをグループ分けしました

ふせんに書き出された言葉は、広域連携、まちの規模、公共とは何か、言葉の選び方、人材育成、記録の残し方、そして「モヤモヤ」といったまとまりに整理されています。

クロストーク「わたし」とまちをつなぐアートの「はたらき」

両日の話し手が登壇し、ここまでの対話と参加者の「ふせん」などをもとに話し合いました。



●すでにあるものをつなぎ直す

- ・「可児市の ala にあたる活動は仙台にもある、ゼロからではない、ただ散らばっていて見えないだけではないか」、という指摘がありました。
- ・他都市と比較したことで、かえって仙台の蓄積に気づかされたという応答もありました。
- ・地域ごとの特性に応じて考え、すでにある拠点や活動をつなぐ役割こそ必要ではないか。災害時の文化的な支援に関連し、近隣に限らず、自治体の枠組みを越えて広域に人材育成の機会を共有するという意見も出ました。

●活動の価値をどう言葉にするか

- ・文化事業について、効果を金額に換算して示す方法や、数値では測れない変化をエピソードとして蓄積していく試みが紹介されました。
- ・一方で、文化は、すべてを効用に置き換えることはできないという意見や、文化は特性上、各地域などサイズによってどこまでも小さく考えることができるという意見もありました。

●「つなぎ手」をどう支えるか

- ・人をつなぎ、場を回し、言語化して、記録を残す。こうした仕事は現在、これまでは、属人化しながら、それだけで生計を立てるのは難しかったという指摘がありました。
- ・全体を見るディレクター人材やコーディネーター人材といった「つなぎ手」が、施設で雇用されていることが必要という提案もありました。

●人と情報が集まる場をどうつくるか

- ・10-BOX や ala には、つくり手が滞在して制作する仕組みがあります。そこに人がいることで情報が集まり、あの人に聞けば誰かにつないでもらえる、という期待が生まれているといいます。多くの既存のホールでそれが起きにくいのはなぜか、という問いが出され、属人的な要素なのか、場の性質なのか、滞在という仕組みによるのか。ala からは、誰でも相談できる窓口を事業として立てているという回答がありました。

●記録を引き継ぐには

・プロセスをアーカイブする人の重要性についても話題になりました。せんだいメディアテークの「3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター」は、市民一人ひとりが記録を残すことを支える仕組みとして全国的にも先駆けて続けられてきました。

・これまで各所が担ってきた事業と連携しながら、新しい施設が何を引き継ぐのかを考える、という声も上がりました。

最後に

2日間を振り返り、最後にナビゲーターの及川さんから、「このプログラムをきっかけに、文化施設とは、自分の物語の中でどういう位置づけなのか」を考えてほしい、そして「モヤモヤを排除せず、そっと置いておけることが文化施設の懐の深さである」とのまとめがありました。

モデレーターの佐藤李青さんは、プログラムの主旨である「議論の土台となる視点を育む」に立ち返ると、文化芸術、災害文化、といった言葉を含む広さを考える材料が2日間の議論の中で持ち帰れたのではないかと振り返りました。また、10-BOX の取り組み、ala の取り組みも 20 年以上の経験の中で獲得されてきたものであることに触れ、良いコンセプトがあるだけでなく、これから我々が何を獲得していくのか、20 年後に同じような話ができるかどうかを左右するため、今後もさまざまなシーンで議論が続いていくことへの期待を込めて閉会となりました。

2日間の対話や参加者のコメント、レポートは、今後、複合施設の事業や管理運営の検討に生かしていきます。参加者のみなさま、ありがとうございました。